

第三編 下総御料牧場の春

約260年続いた「牧・牧士」の制度は江戸幕府から、明治新政府の管轄へと代わり、明治8年、内務卿であった大久保利通の主導により「下総牧羊場」と「取香種畜場」が創設されて以来昭和44年、成田空港建設に伴い栃木県高根沢町に移転するまでの、およそ100年以上日本の馬匹改良と畜産全般を支えた「下総御料牧場」歴史の舞台の三番目は、成田市三里塚にある「三里塚御料牧場記念館」を訪ね現在に至る、競走馬の歴史に近づいてみようと思います

明治の新しい風と共に

馬匹改良の夜明け

【牧の開拓・下総御料牧場へ】

明治7年、幕末期に25人いた旧佐倉牧士と牧士見習は5人になり、彼らは取香牧の取締役に任命された。佐倉七牧の大半は、新政府が打ち出した窮民救済のため、開墾地として払い下げられたが、取香牧だけは官有地として残り、旧佐倉牧士が管理することになったのである。

また、開墾が始まった村には、個々に地名が無かったため、字名が順番に付けられた。それが、
二和 三咲 豊四季 五香
六実 七栄 八街 九美上

十倉 十倉一 十倉二
十倉三である。(P11地図参照)

このうち、七栄と十倉は現在も富里町の地名として残っている。

更に、明治8年には、下総御料牧場の前身として、「下総牧羊場」と「取香種畜場」が、事務所を十倉村両国(現富里町高堀)に置き、牧羊や牛馬の畜産改良を目的に開設された。

その理由は、先の開拓事業の推進と共に、時の内務卿・大久保利通によって、近代牧畜の重要性が説かれ、青草や樹林に恵まれ、しかも物資の輸送に便利な地の利が選定の条件となつたためだ。

牧場は取香牧と、十倉、七栄、十

余三の3か村から用地を買収し、広さは約4200町歩であった。

その後、明治13年、下総牧羊場と取香種畜場が合併し、明治21年には、「宮内省下総御料牧場」と改称され、牧場事務所も高堀から三里塚へ移転した。

このように、佐倉牧の歴史は開拓から下総御料牧場へと引き継がれ、昭和の初期までは、羊や牛の振興に重点が置かれていた。

しかし、競走馬の改良・繁殖を本格的に再開した昭和2年以降、現在の日本の競走馬の原点とも言える、偉大な種牡馬が輸入されることとなるのである。



内務卿・大久保利通肖像

風の優駿

～野馬から競走馬に至る歴史の風～

満開の桜の下で、追い運動をする若駒たち。(写真：三里塚御料牧場記念館所蔵)

風の優駿

～野馬から競走馬に至る歴史の風～



三里塚御料牧場記念館

日本の競走馬の原点

多くの優駿を輩出

【昭和初期の馬産の発展】

明治から大正、昭和、平成と、この時代も「早く・強い馬づくり」を目的に、日本は海外から多くの種牡馬を輸入し続けてきた。

その中で、現在の日本のサラブレッドの原点とも言える、2頭の種牡馬が下総御料牧場に繋養された。

昭和2年、種牡馬トウルヌソルは、当時大卒初任給・約60円の時代に、98,076円という破格の値段でイギリスから輸入され、初代ダービー優勝馬のワカタカなど、6頭のダービー馬を輩出するなどの実績をあげた。

また、昭和10年に同じくイギリスから輸入したダイオライトは、三冠馬のセントライトを輩出。

ちなみに三冠レースである、皐月賞、東京優駿（日本ダービー）、菊花賞を制した歴代の三冠馬は、セントライト、シンザン、ミスターシービー、シンボリルドルフ、ナリタブライアンのみである。

下総御料牧場は、この2頭の種牡馬の輸入と共に、多くの馬の育成や、毎年10頭の種牡馬候補を生産した。そして、これらを払い下げ、民間牧場の馬匹改良にも貢献するなど、日本の競走馬の原点として、小岩井農場、新冠牧場と、その地位を競っていた。



トウルヌソル（写真：三里塚御料牧場記念館所蔵）
1922年（大正11）生まれ 鹿毛 英国産
昭和2年に輸入 当時6歳

競走成績は明4歳から6歳までの間に1着6回、2着5回、3着2回。産駒数は374頭（余勢種付を含む）に達し、10年から連続5年間リーディングサイアーとなった。特にその産駒のなかから東京優駿競走（ダービー）に、6頭の優勝馬（ワカタカ、トクマサ、ヒサトモ、クモハタ、イエリュウ、クリフジ）を出している。



名馬探訪 Part 2



ダイオライト（写真：三里塚御料牧場記念館所蔵）
1927年（昭和2）生まれ 鹿毛 英国産
昭和10年に輸入 当時9歳

競走成績は明3歳から6歳までの間に24回出走。1着6回、2着2回、3着5回、獲得賞金18,275ポンド。産駒は272頭で17年から3年間リーディングサイアーとなった。産駒の中で最も有名なのはセントライトである。

セントライトはダイオライトの余勢種付により、13年に生まれ16年の第10回ダービーに優勝したほか、同年の皐月賞、菊花賞に優勝してわが国最初の3冠馬となった。

扶桑牧場も御料牧場当時の厩舎を利用するなど、今でもそのおもかげを垣間見ることができる。

また、下総御料牧場は、競走馬や御料乗馬（皇室騎乗用馬）、農耕馬を始め、牛、羊、にわとりなどの家畜のほかに、野菜や乳製品など、多くの皇室御用達の農産物を生産していた。牧場内には軽便鉄道の路線や、1マイル（1,609m）馬場が三里塚と富里の両国地区にあり、春や秋には「草競馬」が行われるなどの光景も見られ、両国の両馬農業者協同組合では、軍馬や農耕馬の種付などが行われていた。



中野福治さんの勝負服姿（写真：中野よね氏所蔵）

両国で行われた草競馬で、優勝したときの写真。公認のジョッキーだった中野さんは、わざわざ写真屋を呼んで撮影している。



とうざいば
当歳馬の追い運動・10月頃（写真：小川栄一氏所蔵）

その年に生まれた馬を当歳馬という。まだ鞍付け、ハミ付けをしていない当歳馬たちを、走路で強制的に運動させるために、追い運動を行っていた。



ほほ
2歳牡馬の放牧風景（写真：稲野辺実氏所蔵）

広大な放牧場に放された牡馬たちは、じゃれたり、けんかをしたりしながら、段々に社会性を身につける。その後、鞍付け、ハミ付けなどを行い、3歳の春には牧場内で開催されたセリ市に出され、いずれも血統が優れているため高値で売却された。ちなみに昭和7年の最高価格は23,000円で、この年トウルヌソルの産駒ワカタカが、第1回ダービーで優勝している。



3歳馬の騎乗運動（写真：小川栄一氏所蔵）

1マイルの馬場で行われた騎乗運動。騎乗訓練では、常足、速足、^{かけあし}駆足を行う。両国（富里）には厩舎が2棟あり育成馬の調教をしていた。また、両国の馬場では、毎年花見どきに馬好きが集まって、草競馬が行われ、大勢の人でにぎわった。



自分の育てた馬がダービー2着
そのときは、本当に嬉しかった

恵畑政夫さん（元・御料牧場職員）

17歳で採用された私は、当初は臨時職員で、戦前は両国（富里）の牧場で競走馬の調教をしていました。育成馬の厩舎は2棟あり、その内の1棟は今も残っているようですね。1人で2、3頭を担当し、鞍付け、ハミ付けから馴らしていくのですが、なかなか思うように調教できない馬もいました。私が育てたテツサクラという馬がダービーで、2着になったときは嬉しかったですね。

御料牧場の馬は強く、ダービーでは、ワカタカ、トクマサ、ヒサトモ、クモハタなどがいましたね。ダービーといえば、下総御料牧場が小岩井農場と言われていたんです。



三里塚御料牧場記念館（成田市）

社会教育指導員である師岡裕行さんから、下総御料牧場の歴史の説明を受ける小林特派員。「下総御料牧場は、最初は富里町にあったんですね」とびっくり。館内には、畜産振興のパイオニアとして、輝かしい足跡を残した御料牧場の歴史を後世に伝えるため、御料牧場の概要 御料牧場の歴史 牧畜と農耕 研究技術の発展 皇室と御料牧場 三里塚と文人の6つのコーナーから展示されています。記念館が建てられている場所はかつて、下総御料牧場の事務所があった所です。



房総の魅力100選
下総牧羊場跡・千葉県指定史跡（富里町両国）
明治8年、大久保利通内務卿の主導により七栄、十倉
の両地区に牧羊場を設置、両国区に勤業寮本庁を置いた。

三里塚御料牧場記念館は、昭和56年から公開していますが、年間3,500人ほどの方がお見えになります。館内には、桜と馬の牧場として、多くの人々に親しまれた旧宮内庁下総御料牧場の開場から、成田空港の建設によって昭和44年に閉場となるまでの歴史や、牧場周辺の自然などを、ビデオや写真、パネルなどで紹介しています。

下総御料牧場は、下総牧羊場と取香種畜場が合併して出来た牧場ですが、早くから西歐式農法を取り入れるなど、馬匹改良にも力を注ぎ、わが国の牧場経営の模範となるよう改革を行ってきました。

昭和2年に輸入したサラブレッドのトウルヌソルや、その後輸入したダイオライトがダービー馬を輩出するなど、競走馬の発祥の地として、日本の近代競馬に大きく貢献している。

Interview 04

この地で民間牧場が育んでいったのは、佐倉牧や御料牧場の存在も要因の一つでしょうか。



三里塚御料牧場記念館
社会教育指導員
新島 新吾さん

ます。その、トウルヌソルの仔で第1回のダービー馬ワカタカを飼育していたのが、私の父の野平保蔵で「馬のことなら野平に聞け」と、牧場内では言われていたそうです。

下総御料牧場の周辺には、当時から多くの民間牧場がありました。これは、佐倉牧があったので、やはり気候・風土が馬の飼育にあっていたこと、また、御料牧場の一部が民間に払い下げられたことが考えられるのではないのでしょうか。

御料牧場が生んだ現在の牧場

馬産地の新たな展開へ

【競走馬のふるさと】

桜と馬の名所として親しまれた下総御料牧場は、昭和44年9月、成田空港の建設により約100年の歴史に幕を閉じ、栃木県高根沢町に移転することになる。

下総御料牧場の存在は、日本の畜産の振興や馬匹改良の始まりとし

て、高い功績を残すと同時に、この地に多数の民営牧場を生む要因ともなっていた。

北海道に拠点を移した社台ファームも昭和14年に、千葉社台牧場として新木戸に開設された。

現在、富里町には18の牧場が競走馬の育成や、わずかであるが生産をめざす牧場も点在している。

下総牧羊場が設立された明治8年

以来、富里町は馬産地としての名残を残し、両国神社の境内には、大久保利通が主導した下総牧羊場跡の「碑」がそつとたたずんでいる。

その碑からわずかに離れた場所に「競走馬のふるさと案内所」が、古き馬産地に、新たな競走馬の振興をめざしているのである。

春駒

高村光太郎

三里塚の春は大きいよ。
見果てのつかない御料牧場にうつすり
もうあさ緑の絨毯をしきつめてしまひ、
雨ならけむるし露ならひかるし、
明方かけて一面に立てこめる杉の匂に
しっとり掃除の出来た天地ふたつの風景の中へ
春が置くのは
生きている本物の春駒。



すっかり裸の野のけもの清浄さは、
野生さは、愛くるしさは。
ああ、鬣にも毛臭い生き物の
香を靡かせて
ただ一心に草を喰う。
かすむ地平にきらきらするのは
尾を振りみだして又駆ける
あの栗毛の三歳だろう。
のびやかな、素直な、ういういしい
高らかに荒っぽい
三里塚の春は大きいよ。